

4. 1990年代以降のタオル不況後の活動

「病院での何でも屋」と「へ通し職人」の二つの草鞋

藪内澄子氏は、へ通し職人の傍ら、60歳から公益財団法人正光会^{しょうこうかい}今治病院で雑用係として働き始めた。旭染織を退職後、空いた時間を利用して何かできないかとおもい立ち、職業安定所の求人募集を見に行ったのがきっかけである。同病院はちょうど人手不足であり、「ひと月でもいいから来てくれる？」ということでもとんとん拍子に話が進んだ。それから20年、病院とは腐れ縁である。

雑用の内容は、病院長のカバン持ちから、生け花の経験を生かして病院内の花を生けたり、掃除をしたり、その時々によって必要な雑用を何でも請け負う「何でも屋」として重宝がられた。「うち、花が好きなんよ。花だけやったらメリハリがないから木も一緒に生けるんよね」と藪内氏。花は自腹で買ってきたが、花だけでは見応えがないので、あまり費用をかけないように工夫を凝らし、山から生花に合う木を拝借したこともある。暗い雰囲気になりがちな病院に小さな明るい光を差し込むことも、藪内氏の仕事のうちだった。

病院では、タオル業界とはまったく違う人たちに囲まれて新鮮な毎日を過ごした。今治病院主催の慰安旅行は毎年開催され、国内では大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）や海外では韓国などへ出かけ、多忙な日常を離れて旅に出ることは藪内氏にとっていい気晴らしになった。



今治病院「正光会」の慰安旅行

大阪のユニバーサル・スタジオ・ジャパン（左）と韓国（右）

病院の仕事が終わると、タオルの仕事に向かう。この頃はおもにタオルメーカーの依頼でへ通し作業を夜の 7 時から始めて夜中の 12 時に終えることはざらにあった。

80歳で病院を退職してからは、昼間もタオルの仕事をしている。さすがに夜中の 12 時になることはなくなったが、日曜日以外の週 6 日、朝早くからタオル工場に入り、夕方に仕事を終えて帰ってくる生活は今もつづいている。藪内氏のかつての、あるいは現在の仕事の請負先は、老舗の田中産業（株）を筆頭に丸栄タオル（株）、（株）玉井タオル、楠橋繊維（株）などのタオルメーカー、そして東洋繊維協同組合や越智源（株）などの染色加工業者など数社に及ぶ。準備工程のすべてをこなせる藪内氏は、タオルメーカーでは「へ通し」の作業、染色加工業者では「糸巻き」の作業をおこなう。タオル製造に関わる加工業者が集積している今治地域では、藪内氏のようなフリーランスで働いている職人がおり、急な仕事のニーズに柔軟に対応できる人材がいる。これは、産業集積の大きなメリットである。

藪内氏の請負先は多岐にわたるが、毎回「自分のところの工場やおもって仕事をする」のが藪内氏のモットーである。藪内氏の仕事ぶりは、スピードが早くて丁寧、そのうえ急な依頼や変更など無理難題にも応じるため、受注先にとって手放したくない相手である。たとえば、次の日の午後までにへ通しの準備が必要という依頼でも、けっして無理とは言わない。明朝4時頃に工場に入り、午後1時までには仕事を終わらせる。急な依頼は日常茶飯事であり、そのたびに臨機応変に対応するのが藪内流である。

互興織物時代から現在のフリーランスの時代まで、70年近くずっと睡眠時間は平均3～4時間である。昼間の病院勤務の時期もあったが、ほぼ一日中、タオルの仕事をしてきたし、今もそうである。インタビュー時に「好きな本」について聞いてみたが、「本をゆっくり読む時間なんてなかった。そうした時間を惜しんでずっと働いてきたから」という回答が返ってきた。

上述のように、80歳を過ぎても地元のタオルメーカーや染色加工業者の数社と取引があるが、70年近くも現役をつづけられているのは、藪内氏の確かな技術によるものだ。糸巻きの作業を例にとると、普通の職人さんなら一日半、あるいは二日かかるところを、藪内氏の手にかかると一日で終わる。限られた時間内で急の依頼や無理な注文にもできるだけ応えようとして、朝早く工場に来て準備作業にとりかかり、作業が終わるまで何時になってもお構いなしである。その働きぶりは、周囲の人たちが感嘆するほどである。

藪内氏によるへ通しと糸巻きの正確さはもちろんであるが、作業のあとの仕事場はつねに整理整頓され、ほこりや糸くずなどのゴミも少ない。この点も取引先から信頼を得ている理由である。



東洋繊維協同組合第二工場の糸巻きの工場
で作業をおこなう藪内澄子氏。12月の寒い
時期に防寒着に身を包み、休むことなく作
業を続行。洋服の赤色やピンク色は藪内氏の
トレードカラーのひとつ。

今治のタオル業界は、他の地域産業と同様に人手不足と後継者不足に悩んでいる。藪内氏のようなフリーランスとしてへ通し仕事を請け負うタオル職人は、現在今治では藪内氏と実妹の上野和美氏を含めて2組4名しかいない（インタビュー時の2020年3月1日現在）。タオル製織の技術が自動織機から革新織機へ移行し生産性が数段に上がっても、へ通しは変わらず必要な工程であり、ますますその需要は高まっている。タオルづくりは細かな分業で成り立っているが、あまりにも地味で人目に付かないへ通しや糸巻きのような作業を淡々と日々おこなう人たちがいることによって、今治のタオルづくり、さらに言えば日本のモノづくりは支えられている。

（次号につづく）

